

## 【書評】

# 天野正輝『総合的学習のカリキュラム開発と評価』

(晃洋書房、2000年7月発行、180ページ、2300円)

河原尚武

わが国の教育史をたどれば、大正自由教育期における「合科」や「統合」に向かう実践の高揚、戦後のコア・カリキュラム運動や問題解決学習が生み出した成果、いわゆる能力主義的な教育政策の下で、「地域や国民の現実的課題」をめぐる共同学習によって社会認識と自然認識の統一を目指す領域として提起された「総合学習」論、そして、「生活と教育の結合」をめざす実践として後に位置付けられるようになったさまざまな生活教育の系譜など、今日の「総合」論議にいたる豊かな蓄積をみることができる。

これらは、本書第5章「総合学習の遺産に学ぶ」でも内外の先例を含めて論じられているとおり、背景となった教育思想や、教えることと学習の成立のあり方に関して、あるいは実施・普及過程に関与した担い手をめぐって、それぞれかなり位相を異にする。しかし、いずれにしても、単なるカリキュラムの形態論にとどまらず、その多くは、何らかの程度と方向性において、教育の改造ないし改革の意図を含んでいたと言ってよい。

それでは、今日の「総合的な学習の時間」は、数々の「総合学習の遺産」の延長線上にいかなる形で位置付けることが可能なのか。新学習指導要領を中心とする教育課程の枠組みは、学校やカリキュラムのあり方をめぐって、実際のところいかなる改造の見取図を持っているのか。

教育界に行き交う独特なキャッチフレーズや公式用語のレベルで論じているだけでは、おそらく又もや改革に対する学校現場の根強いシニシズム（教員文化としてのの）を増幅することで終わるだろう。相も変らぬ教育課程行政の現状や、矢継ぎ早に現実化する「教育改革」諸施策との関連性、さらに現在移行措置として一般の学校で取り組まれていることや、そこでの教師の意識などを十分ふまえた上でリアルな問題提起を行うこと。カリキュラム研究に今求められているのはこうしたことではないか。「総合」の時間を含んだ、このたびの教育課程のあり方（構造）に今もって懐疑的な評者にとって、本書から学びたいと考えたのは以上のようなことであった。

本書は「『総合的な学習の時間』の新設は、カリキュラム構成や指導のあり方、学習活動やリソースの選択・組織、教授組織、評価のあり方まで根本的に見直し、学校教育の基調を転換しようとしていると考えてよい。」(78頁)とする立場から、以下に示すように、「時間」本体の構想や実践はもとより、「統合の視点」を生かした学校カリキュラムの全体構造とその開発のあり方

で、数多くの課題に込めつつ、現場で取り組む人々に実践の方向性を明らかにしたものである。

同時に、著者の言われる、「子どもにとって意味のある学びが成立する条件」や「学習主体形成」といった課題を明らかにすることに結びつくような、方法論としての「カリキュラム研究史」(16頁)、その実際のあり方が、読む者によく納得できる形で展開されていることにも気づかされた。現代に至る多彩な試みを改めて掘り起こしながら、そこに担い手の思想や時代認識、学校論や学習論を読み取ってカリキュラム開発の課題を探る作業、それは天野教授によれば「問題史」としての歴史的研究ということになるのではないかと思われるが、次世代の研究者に、是非批判的に継承してほしいところである。

本書の構成は以下のとおり。(きめ細かく項毎の論及が続くが、章節のみ挙げておく。)

第1章 カリキュラム開発の理論と方法／1節 学校教育とカリキュラム開発／2節 カリキュラム研究の意義と方法／3節 カリキュラム開発をめぐる基本課題

第2章 カリキュラム評価の理論と方法／1節 教育活動における評価の役割／2節 カリキュラム開発とP・D・S・I／3節 授業における評価の理論／4節 形成的評価の意義と生かし方／5節 通知表と指導要録

第3章 「総合的な学習の時間」の基本的性格と課題／1節 教育改革と「総合的な学習の時間」／2節 いま、なぜ「横断的・総合的な学習」なのか／3節 生活科と「総合的な学習の時間」

第4章 「総合的な学習の時間」のカリキュラム開発／1節 カリキュラムの構想／2節 総合的な学習のカリキュラム開発の実践例

第5章 総合学習の遺産に学ぶ／はじめに／1節 「合科・総合」の系譜／2節 日本における合科・総合の遺産／3節 総合学習が主張される背景／4節 そこから学びとるものは何か

以上のうち、5章後半では、本書の基調となっている総合学習の意義と必要性の根拠、例えば「既存の教科教育のあり方に対するアンチテーゼ」とか、「既成の諸教科の内容領域や教科外活動では覆い尽くせない学習課題」を抱えるようになってきたこと、あるいは子どもにとって「生きたリアリティに触れる生活実践活動」が衰退してきたことなどがまとめられている。一方同じところに、いくつかの問題点や課題、例えば「一人ひとりの学びの成り立ちや構造や道筋」に関わって発達論の理解が前提となるべきこと、教科学習と総合学習との間で「機能的分化」に陥って「教科学習における総合的観点」を稀薄化させないこと、総合学習と他の領域との内容的な関連を明確にすべきことなどが指摘される。他にも、「知育偏重」論による一面的な教科教育全般への批判に陥らないこと、計画的な実践の評価・点検が必要なことも強調されている。

これらは、歴史的研究を踏まえての指摘ではあるが、いずれも現に直面している実践上の課題でもある。ここで挙げられた必要性と、予想される問題点や課題とをどのように突き合わせて実践化するのか、実はその点にこそリアルな問題提起が必要とされるのだが、その意味では改めて

本書第1～4章で取り上げられていることの意義がここでより明確になってくるのである。

例えば1、2章は、カリキュラム研究の基本課題やカリキュラム開発の手続きを論じながら、「トップダウン方式」(11頁)に拠らない各学校レベルでの編成・改善のための手がかりを提示したものと評者は読んだ。本書の随所で、例えば、『総合的な学習の時間』のカリキュラムを構想し、単元を開発するという事は、当該学校の全体カリキュラムを構想し、デザインするという事であり、全体のバランスを明確にするということである。(109頁)と指摘されているように、今次改訂をいわば奇貨として、現代の教育的な課題をカリキュラムに反映させ、学習方法を再構築していくための理論的枠組みが、そこでは提示されているのである。さらに、実際例の紹介検討に加え、「単元づくり」の基本にまで立ち入って実践的な提起を試みられたところなどもあって(4章)、著者が学校単位でカリキュラム開発の力量を備えることを強調している、その視野の広さがよく理解できた。

「学校を基礎にしたカリキュラム開発」は以前からの課題だったはずだが、教育課程法制のもとで一般的にはほとんど実質化してこなかったと言ってよい。「総合」の新設を契機に各学校での創意工夫が改めて求められているが、1章でも言及されているような「授業改善とカリキュラム再編(カリキュラム開発)を結びつける回路」(14頁)が今後どのように確保されるのか。本来は一定の基準とフレームを前提にしながらも、教師や学校、地域のレベルで、必然性と客観性をもった教育内容研究が推進できるような体制が必要だったはずである。

残念ながらこのたびの「総合」は、やはり現状では形式化・画一化を生みやすいトップダウンによるものであった。必ずしも教科分立カリキュラムの行き詰まりに責めを求める論議から出発しなくても、本書3章で詳細に検討されているような「カリキュラム研究における総合性の意味」などを教師たちが十分に理解した上で、個性的な試みが広く展開され、しかも学校相互の実践評価を経て、多様な「総合学習」のあり方が普及していくといった形になっていれば、そのほうが真の意味で画期をもたらすことになったのではないかと考えられるのである。(こうした順序とは逆に、すでに手引かないし範例が県の教育行政によって配付されているところもある。)

この点で興味深く読んだ「遺産」のひとつが、長野師範附属小学校の淀川茂重による実践、「郊外の学習」「鶏の飼育」「長野市の研究」と6年を通じて取り組まれたプロジェクトである。系統的な問題解決学習とでも呼ぶべきか、そこには自ずと発達的な見通しが反映されており、子どもの経験と学習対象における系統性が浮かび上がる。これらの点は本書において強調されているところでもあるが、カリキュラム開発のあり方として、教科の総合的な局面を拡大するにしても、あるいは横断的な機会を設けるにしても、欠かしてはならない観点と言ってよい。

本書からは、ほかにも数多くの示唆を受けた。表現や構成の工夫によって、現場に本質的な論点が届くよう努力されているところにも学ぶ点が多かったことも付け加えておきたい。

(鹿児島大学教授)